

北のとびら

vol. 111

平成29年3月



特集

市民参加型演劇制作事業 発足15周年
あさひサンライズホール(士別市)
市民参加演劇の継続でつくる
まちの交流拠点=劇場

平成28年度 アート選奨
(アート選奨K基金事業)

アートのチカラを考える
清水沢コミュニティゲート(夕張市)

街歩きアート
過去と現在、伝統と新しさが融合し
進化する、ものづくりのまち
[室蘭市]

エッセイ
穂村 弘

表紙作家の紹介
酒井 広司



9 「花火、舞い散る」2010

10 「境目に降る雪」2011

11 「グッバイ父さん」2012

12 「シング・シング・シング」2013
(北海道舞台塾事業)

13 「君の先」2013

14 「ウラルの森」2014

15 「裸電球に一番近い夏」2015

1 「明日も陽だまりで」2003

2 「花の嵐団九郎一座」2004

3 「なにもしない冬」2005

4 「瞼の母」2005

5 「弁天堂顛末記～春はぼたもち」2006

6 「春日ノ原駅のこと」2007

7 「ホテル・トロップへようこそ」2008

8 「ビビアンにあいたい」2009

●特集

**市民参加型演劇制作事業 発足15周年
あさひサンライズホール(士別市)**

市民参加演劇の継続でつくる まちの交流拠点=劇場

人口2000人足らずの旧朝日町で、平成6年に誕生した公共施設「あさひサンライズホール」。士別市と合併以降も、市全体の文化振興の要となり、鑑賞事業や小中学校へのアウトリーチ、市民参加による演劇制作などの自主事業を実施してきました。約15年の間に制作した舞台の数は、学校教材用も含めると35本以上になります。小さなまちでの演劇制作事業が育んだ、劇場を中心としたコミュニティの有り様を紹介します。

第一線で活躍する演出家と 約2カ月間の芝居づくり

「オーディションではなく、希望する人は全員、出演できる」。これはあさひサンライズホールが実施している市民参加型演劇制作事業『体験版芝居で遊びましょう』で、平成15年度のスタート時から守られてきた決まりごとです。

「事業の目的はコミュニケーションのプラットフォームを作ることで、上手な演技を披露することではあります。だから、上演は基本的に芝居で遊びましょう」と、平成15年1回だけだし、それぞれの生活がある。ので稽古の欠席もやむを得ない。あさひサンライズホールの館長はそう言います。まちの外から招く演出家にも、この決まりごとを最初に伝えて依頼していくのだそうです。

ただし「上演する以上、鑑賞に堪える作品を目指します。そのためには大人が全力で、真剣になつて遊ぶ必要がある。またそうしないといい関係性は生まれない」とも。脚本・演出は第一線で活躍するプ



あさひサンライズホールの館長、漢幸雄さん

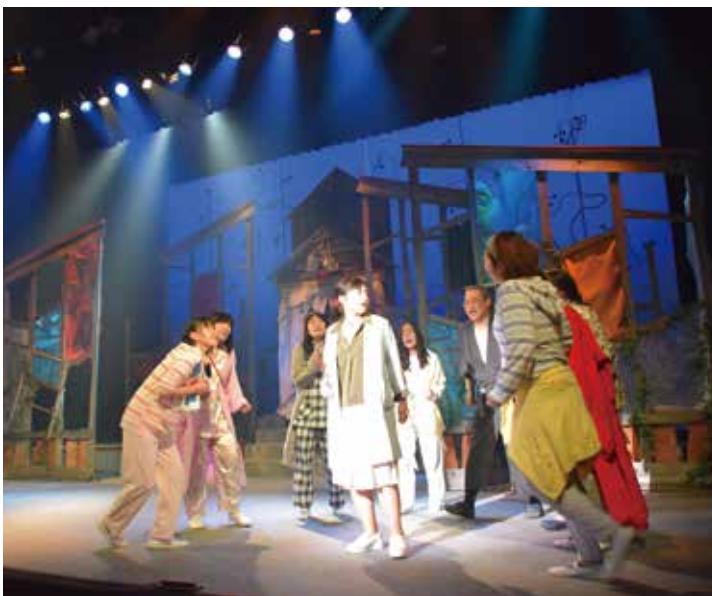
口に依頼し、演出家は1～3ヶ月ほどまことに滞在して制作に当たります。上演日が迫る頃には演出家から厳しい指導がビシビシ入るようになります。気をつけば、参加者もそれに応えようと無我夢中になつてゐるのだそうです。

1回目の『体験版』では、長年札幌で演劇づくりに関わってきた斎藤ちずさん（NPO法人コンカラニヨ理事長）に演出を依頼。斎藤さんは一年間まことに滞在し、舞台経験がない人がほとんどの参加者とワークショップを通じてコミュニケーションをとりつつ、「芝居で遊ぶ」ということを浸透させていきました。

翌年は、集客記録において北海道NO.1の実績を持つ劇団イナダ組の主宰・イナダさんが脚本・演出

られたのがあさひサンライズホール設立から最初の10年間、事業は舞台芸術や音楽などの鑑賞が中心でした。しかし「劇場が小さな地域コミュニティで担える役割は、交流拠点となること。そのためには市民参加の自主企画事業が必要」と、当初から考えていた漢さん。ピッケンバンドや合唱、ダンスなどでの可能性を探っていたと言います。

現在、『体験版』には「6回出演したら出演者を卒業する」というルールがあります。常連が居着くのではなく、部活動のようにメンバーがゆるく入れ替わることで、ノウハウを受け継ぎながら新しい関係性が生まれることを狙つてゐるのであります。卒業したメンバーはスタッフとして参加したり、独自に劇団を作る



平成29年3月11日に上演された、「体験版 芝居で遊びましょ♪」vol.14『夕日岬第十六診療所のニセ医者と患者ども』の一場面。
出演者21名、スタッフを合わせると延べ60名が事業に参加しました

●特集 市民参加型演劇制作事業 発足15周年 あさひサンライズホール（士別市）



「演劇で大人が真剣になつて遊んだ結果、まちの内外で新たなつながりが生まれました」と、漢さんは胸を張ります。

「劇場にできるのは、倦まず耕し続けてよい土を作り、種を播き、祈ること。そこから先は、種が芽吹き花を咲かせ、また種を付けることで受け継がれ、広がつていってくれるでしょう」。

目指しているのは「誰もがどこかに居場所を見つけることができる、豊かで熟成したコミュニティ」。その交流の拠点としてあり続けるために、あさひサンライズホールの取り組みは続けられています。

などして演劇や劇場と関わっています。

『体験版』の参加者は市民に限らず、近隣市町村や遠くはオホーツク沿岸の西興部村から通つた人も。また、転勤や結婚でまちを去つた人の中には、上演を観に戻つてくる人もいます。芝居に関わった人同士で結婚した夫婦は10組近く。その

結婚式に出席するため東京から来てくれた演出家もいれば、宿でなく住民の家に宿泊するようになつた演出家もいます。また、一流の演出家やスタッフからのアドバイスを受けて成長してきた大道具チームは、工房を立ち上げてプロの公演の舞台美術製作を引き受けるまでになりました。



「体験版 芝居で遊びましょ♪」vol.14で脚本・演出を担当した中島淳彦さん。劇団ホンキートンクシアターで作・演出を手がけ、解散後はフリーの脚本家として活躍。現在、劇団道学先生、劇団ハートランドの座付き作家。主に人情味のある喜劇を得意とし、さまざまな劇団などに新作を書き下ろしています



を担当。以降、道内のみならず東京で活躍する演劇人に脚本・演出を依頼して回を重ね、これまで森さゆ里さん（文学座）、大関真さん（劇団スープ・エキセントリック・シアター）、日澤雄介さん（劇団チョコレートケーキ）などが、地域の人たちと触れ合いながら演劇制作に当たつきました。脚本は全て、出演者の個性に合う役柄を登場させてつくる「当て書き」です。

発足15周年、14回目の実施となる今年は、9回目に脚本・演出を担当した中島淳彦さん（劇団道学先生）に再び依頼。3月11日、音

樂喫茶時代の懐かしい歌を交えて展開するファンタジー音楽劇『夕日岬第十六診療所のニセ医者と患者ども』を上演しました。

「正直なところ、劇としては完成には届いていません。けれど、何年後、何十年後に思い出しても『あのときは頑張つたなあ!』と思える、宝物みたいな時間になつてくれたらいいな、と思ってます」と中島さんは言います。「この企画の趣旨は芝居で遊ぶこと。でも命がけで自分のできること以上を目指すことが『大人の遊び』なんです。失敗してもいい。しっかりと遊ぶことは、

しつかり生きること。それが伝わること嬉しいですね」。

関わり合うためのツールとしての演劇

あさひサンライズホールのある旧朝日町エリアは、中核都市となるいる旭川市まで約70km。生活の中で舞台芸術に触れる機会はあまりない、かつては電波が受信し難く、視聴できるテレビ・ラジオも限られしていました。そこで、住民の熱い期待を受け、当時の町の単年度予算に迫る約26億円を投じて造

鉄の楽しさ、面白さを体感

鉄のものづくり体験 輪西几条アトリエ

かつて新日本製鐵(現・新日鐵住金)の門前町として賑わっていた輪西地区に、室蘭の鉄の文化や、鉄を身近に感じられる体験の場が誕生しました。開設したのは、輪西商店街の有志が中心となり結成したNPO法人テツプロで、ボルト人形「ボルタ」を製作していることで知られます。



須藤さんも輪西に事務所を構え活動している



コーケスで熱した鉄を叩いて曲げ、キーホルダーを作る体験

●室蘭市輪西町2丁目3-10

(川原家具店倉庫)

☎0143-84-5510

(ノールドデザイン)

※体験は完全予約制

(HPに予約サイトあり)

夏休み期間は

土・日のみ予約なし可

www.tetsupro.com/atelier/



イベントでの溶接体験がきっかけで誕生した「ボルタ」

知られざる絶景を伝える

「室蘭工場夜景+a展」実行委員会

近年、全国的に話題となっている工場夜景のひとつが室蘭です。市職員の森大輔さんは早くから工場夜景に注目し、アマチュアながら約6年にわたり撮影し、写真展やパネル展も開催してきました。もともと炭鉱など産業遺産に興味があり、開拓の歴史とともに辿るなかで、室蘭とのつながりに気づかされたと言います。「空知の石炭があり、鉄道が敷かれ、積み出し港として栄えた室蘭のまちの成り立ちを写真で記録し、広く伝えたい」と森さん。「+α」は、現在の室蘭の産業としての工場と、過去の空知の産業とのつながりを表しているそうです。

さらに、市内で秘境と呼ばれる場所でのウォーキングも実施。あまり知られていない絶景が見られるなど、鉄のまちの意外な魅力を発見できます。



鵡別岳の麓「すだれの滝」氷瀑。
ナイトウォークも実施した



蓮の葉氷が浮かぶ港
と工場夜景



実行委員会
という名で、
森さん1人で
活動中

●室蘭工場夜景+a展 じっこういいんかい (Facebook)

作品はフェイスブックにて公開（未登録でも閲覧可）。ナイトウォークの参加募集も告知
www.facebook.com/muroranayakei/

C o l u m n

市民が支える、絵画のまち 室蘭市民美術館

室蘭出身の西村貴久子、室蘭を拠点とした高野次郎、熊谷善正、写真家では掛川源一郎など、地元ゆかりの作家の作品を中心に、規模は小さいながらも見応えある企画展示を行っています。

設立にあたっては、「室蘭に美術館を」という市民の熱心な運動がありました。平成12年「室蘭に美術館をつくる市民の会」が発足。平成20年10月に念願の美術館オーブンを果たして以降は「室蘭市民美術館をささえる会」となり、850名ほどの会員が、施設の企画・運営に様々な形で携わる、全国的に珍しい美術館です。

工藤善蔵館長によると、80年以上の歴史がある室蘭美術協会の創立メンバーだった高野次郎の遺品など、膨大な資料はまだ整理の最中のこと。披露の日が待たれます。

●室蘭市幸町6-23 室蘭市文化センター地階 ☎0143-22-1124

開館時間 10:00~17:00 休館日 月曜（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始 入館料無料
muroranm.exblog.jp (室蘭市民美術館をささえる会ブログ)

大正期の洋画家、
中村森（つね）の自画像は、
高野次郎が直接譲り受けたもの



今年1月、入館者13万人を達成



街歩きアート

過去と現在、伝統と新しさが融合し進化する、ものづくりのまち

【室蘭市】



噴火湾に面し、鉄鋼業で栄えてきたことから「鉄のまち」と称される室蘭市。

近代におけるものづくりの拠点として培ってきた技術は、

進化しながら受け継がれ、まちを発展させてきました。

湾岸に工場が立ち並ぶ一方、豊かな自然が身近に広がる独特の環境は、

近年は撮影スポットとしても注目を集めています。

異なる要素を合わせ持つまちは、つねに新たな可能性に満ちています。

室蘭のものづくりの原点

日本製鋼所室蘭製作所

瑞泉鍛刀所



胤匡さんがふいごで炎を調節しながら玉鋼を熱する



小刀（ペーパーナイフ）
も製作



しおぎ（一番厚い部分）
の曲がりがないか確認する
胤成さん



●室蘭市茶津町4

☎0143-22-0143 (総務部総務グループ 鍛刀所管理担当)

※見学・注文は、上記へ要問い合わせ

www.jsw.co.jp



日本刀独特の刃文（はもの）は、
焼き入れで塗る粘土の厚みの境目に現れる

幻の同級生



絵／岡理恵子

或る日のこと。北海道大学時代の同級生の名前を思い出せるかぎりネットに打ち込んで検索してみた。まったくヒットしなかった。だんだん不安になつてくる。こんなことってあるだろうか。検索の仕方が下手なのか。或いは、結婚して苗字が変わったという人もいるだろう。でも、それにしても痕跡がなさすぎる。自分が子供の頃に好きだったお菓子とか歌のフレーズなどを検索して、一件も出てこないといと、本当はそんなものはなかつたのかかもしれない、という気持ちになる。まさか、北大に通ついたこと 자체が夢だったなんてことはないよな。

私が学生だった1981年には、もちろんインターネットなんて影も形もなかつた。でも、改めて考えてみると、同級生たちのほとんどはネットでアクティビティ活動するというタイプではなかつたようと思う。気質というかセンスというか。例えば、クラスの有志が作った同人誌のタイトルは「北の海と道」だった。縮めると「北海道」。これつてある種のバンカラ的な感受性ではないか。当

時だつてバンカラという言葉はもう死語だった。でも、入学式の後に、山伏姿の応援団が寮歌の指導に現れる学校には、その空気感がまだ生きていた。「醒めよ迷いの夢さめよ」と始まるストームの歌に合わせて、男子も女子も肩を組み、足を振り上げていたのだ。インターネットのSNS的な交流からはかけ離れていた。その後、私は北大をやめて上智大学に入った。北海道の国立と東京の私立では、まったく雰囲気や価値観が違つていた。北大のノリで「醒めよ迷いの夢さめよ」と歌つた私は、冗談はよせ、といふ顔をされた。バブルの時代が始まろうとしていた。

穂村 弘
(ほむら ひろし)
歌人

1962年札幌市生まれ。
著書『ソングシケート』『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』『世界音痴』『本当はちがうんだ日記』『によっ記』『絶叫委員会』『君がいない夜のごはん』『蚊がいる』他。2008年より日経新聞歌壇選者。『短歌の友人』で第19回伊藤整文学賞、「楽しい一日」で第44回短歌研究賞を受賞。近刊に北海道新聞の連載エッセイをまとめた『野良猫を尊敬した日』がある。

表紙作家の紹介

「偶景/Sight Seeing」
200008311342440714301

酒井 広司 写真家

Sakai Koji

1960年余市町生まれ、札幌市在住。2016年第68回北海道文化奨励賞受賞。1970年代から北海道を様々なシリーズで撮影、制作している。主に「夏の消失点」(1979年)や1990年代から続く「偶景/Sight Seeing」、「そこに立つもの」、「北海道の旅」などがある。個展のほか「札幌の美術」展(2004年)や「写真の交差」展(1997, 1999, 2000年)、500M美術館オープニング展(2012年)などの企画展にも参加。2014年、札幌国際芸術祭連携企画展「表出する写真、北海道」展(NPO北海道を発信するネットワーク主催)の企画、編集を担当した。同年、第30回写真の町東川賞特別作家賞受賞。公益社団法人日本写真家協会会員、札幌大谷大学美術学科非常勤講師、札幌文化団体協議会会員。

[主な展示]

- 1984年 個展「Living」ギャラリーユリカ(札幌市)
- 1985年 個展「Living」ギャラリーユリカ(札幌市)
- 1988年 個展「Living」ギャラリーユリカ(札幌市)
- 1991年 個展「枯れたものたち」ギャラリーA(札幌市)
- 1996年 個展「Sight Seeing」札幌市資料館ギャラリー
- 1997年 企画展「写真の交差」INAXギャラリー(札幌市)
- 1999年 個展「余市川」余市町図書館
 - 企画展「写真の交差2」札幌市写真ライブラリーギャラリー
 - 企画展Double Image展「Otaru Dream Beach 1998」ギャラリーSEED(札幌市)
- 2000年 企画展「写真の交差3」札幌市写真ライブラリーギャラリー
- 2001年 企画展「北海道現代写真家たちの眼」展
 - 札幌市写真ライブラリーギャラリー
- 2004年 企画展「札幌の美術2004」展 札幌市民ギャラリー
- 企画展「ギャップ」展 札幌市写真ライブラリーギャラリー
- 2005年 個展「そこに立つもの」M+Oギャラリー(札幌市)
- 企画展「北海道、写真のいま ギャップ2」展
 - 札幌市コンベンションセンターギャラリー
- 2007年 企画展「culture&Nature」展 北海道を発信する写真家ネットワーク
 - モエレ沼公園 ガラスのピラミッドギャラリー(札幌市)
- 2009年 個展「Sight Seeing」展 CAI02ギャラリー(札幌市)
 - 個展「印画紙としての写真」展
 - コンチネンタルギャラリー(札幌市)
 - 企画展サッポロアートステージ「白糠縁別1999, 2009」
 - バスセンター地下通路 ※現500M美術館(札幌市)
- 2011年 個展「北海道の旅 セレクトカット」新さっぽろギャラリー(札幌市)
- 2012年 個展「写真のなかの時間」展 ギャラリーレタラ(札幌市)

◎北海道文化財団アートスペース企画展 vol.32

- 酒井広司 個展「山に行く」
会期: 平成29年3月30日(木)~6月30日(金)
9:00~17:00
休館日: 土・日・祝日
※都合により臨時休館する場合があります。
会場: 北海道文化財団アートスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料: 無料

「Sapporo Portraits」
札幌円山「北海道の旅」
洞爺湖から羊蹄山

財団事業インフォメーション（平成29年3月）

人づくり一本木基金（長原實・スチウレ・エング 人づくり基金）

●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な方々に、「ものづくり一本木選奨」を贈呈しました。



○ものづくり一本木選奨 長原賞

桑原 義彦 さん

(木工職人／家具デザイナー／株匠工芸代表取締役／旭川家具工業協同組合会長)

国際技能オリンピック世界大会（スペイン開催）家具部門で銀賞を獲得するなど、木工職人として頂点を極める。自社を、道内を代表する家具メーカーに育て上げただけなく、自らデザイナーとして自社製品の開発に取り組むとともに、旭川家具工業協同組合会長や上川地方技能訓練協会会长、国際家具デザインフェア旭川開催委員会会長などを務め、次代を担う若手の職人やデザイナーの育成に力を注いでいる。

○ものづくり一本木選奨 奨励賞

安藤 哲平 さん

(家具・木工職人／(株)ガージーカームワークス)

- ・平成26年第18回とやま木造住宅設計コンペ特別賞。
- ・平成28年第54回技能五輪全国大会家具部門に初出場し、金賞受章。

藤木 翔希 さん

(左官職人／中屋敷左官工業(株))

- ・平成28年第54回技能五輪全国大会左官部門に初出場し、銀賞受章。

北海道舞台塾事業

●希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」

全国に門戸を開き、次代を担う劇作家や優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことにより、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的として実施しています。

今年度は、優秀賞として『Sの唄』（藤原佳奈作）と『海の五線譜』（吉田小夏作）の2作品が受賞しました（大賞に該当する作品はありませんでした）。

平成28年度北海道戯曲賞 優秀賞作品

『Sの唄』

藤原 佳奈 さん

(劇作家／演出家／俳優 mizhen主宰)



【受賞者プロフィール】

1987年兵庫県姫路市出身。京都大学文学部卒業。2012年に演劇創作ユニットmizhen旗揚げ。以後全作品の脚本や構成、演出を担当。2015年より、Webメディアキュンコレにて、小説「俺の三橋」連載。2015年福岡市文化芸術振興財団 舞台演出家コンペティション『一つの戯曲からの創作をとおして語ろうvol.5』にて観客賞受賞。『夜明けに、月の手触りを』が、第21回劇作家協会新人戯曲賞最終候補にノミネート。第5回クォータースターコンテストグランプリ受賞。

『海の五線譜』

作：吉田 小夏 さん

(劇作家／演出家 青☆組主宰)



【受賞者プロフィール】

1976年神奈川県横浜市出身。2001年に青☆組を旗揚げ。『雨と猫といくつかの嘘』、『時計屋の恋』等、4つの作品で日本劇作家協会新人戯曲賞に入賞。日本演出者協会主催「若手演出家コンクール2003」<作/演出部門>にて、『初雪の味』で審査員特別賞受賞。第9回、第11回AAF戯曲賞、第2回せんだい短編戯曲賞、で最終候補ノミネート。『パール食堂のマリア』で、平成28年度(第71回)文化庁芸術祭参加。